

新歳時記通信

第4号

2011年1月



好尚と和服	1
エロイム、エッサイム—我は求め訴えたり—	2
続エロイム、エッサイム—滝と涼感—	6
続々エロイム、エッサイム—海女と遊覧船—	8
三十分と三百年	10
血が凍りつく	12
雀の四季	16
鳳作私見	18
縁の糸	20
後記	22

好尚と和服

前田霧人

赤塚不二夫が亡くなってから一年になる。漫画『天才バカボン』の連載が始まったのは昭和四十二年であるが、それより三十年前、その決め台詞「これでいいのだ!」と同様のフレーズで以て山口誓子に対峙した俳人がいた。

好尚と当為とは嚴重に区別されねばならない。

無季俳句は嫌いだ、性に合わない、だから作らない、というのなら話は解っている。無季俳句は俳句でない、価値がない、存在理由がない、というからものが解らなくなってしまうのだ。

季を採用するかしないか、結局それは好尚の問題に帰する。それでいいのだ。

無季俳句の魅力は、結局作品そのものを以て知らしむるの他はない。(日野草城「無季俳句綱要」。「俳句研究」昭和十一年十月号)

好尚と当為の問題はニュアンスの差はあれ、定型と自由律、文語と口語なども同様である。今年、二〇〇九年六月に再刊された「口語俳句」新刊号に次の言葉が見える。

ぼくが口語で俳句を作ったのは、自分を一番表す言葉で書くためだった。これからの俳句は口語で、この

意味を市民のうたを作る者として受け止めたのである。

(まつもと・かずや「わがこころのレジスタンス」)

芸術は多数決でない。草城が「無季俳句綱要」を出す一カ月前に没した篠原鳳作は「俳人は暴君でなければいけない。」(「新興俳誌展望」「傘火」昭和九年八月号)と言っている。そして、それは自他に許されるべきものである。今年三月、橋開石『俳諧余談』が和田悟朗編により刊行された。その「四十三」に次のような一節がある。

和服を愛好するしないは、時代の好尚と当人の趣味に属することである。俳句に於ける他の一切の特徴についても同様のことが云い得る。

ここに「和服」とは季節(有季)の謂である。閒石が草城と同じく「好尚」という言葉を使っているのが非常に興味深い。彼は俳諧(連句)の発句が独立したものとされる俳句について、同書「八」で次のように言っている。

個我の潔癖な主張を求めつづける俳句は痩せ細るほかなかるう。時代思潮として止むを得ぬ推移かも知れぬが、母郷忘離の代償は廉くないのである。

俳諧から「母郷忘離」した俳句はもう発句と同じではない。発句の要件とされる季語が必須である必然はないし、俳句が痩せ細らないために、発句以外の平均の要素を取り入れて行くのは自然の成り行きである。

試しに、有季を頑に主張する俳人たちの一句一句を座の文芸、俳諧の発句として実際にイメージしてみれば良い。果たして、それに値する作品がどれだけあるか。そういう観点からの現代俳句批評もまた興味深いのである。

エロイム、エツサイム

—我は求め訴えたり—

前田霧人

二〇〇九年十二月、高橋龍は「龍年纂」の終刊に当たり、次のような内容のユニークな小冊子「龍年纂愛読者御礼配り・郵便番号簿季題地名一覽」を発行した。「瀧」の第二、第三の句と「昼寝」の項は私の追補である。

千五八—〇二〇— 三重県伊賀市瀧・他
瀧 瀧の上に水現れて落ちにけり 後藤 夜半
顛落す水のかたまり瀧の中 高浜 虚子

未来より瀧を吹き割る風来たる 夏石 番矢

千〇一八—一六一— 秋田県南秋田郡八郎瀧町昼寝下
昼寝 三等待合昼寝の男起き上り 高浜 虚子

千〇八八—一五六— 北海道厚岸郡浜中町霧多布湿原
霧 一本のマツチをすれば湖は霧 富沢赤黄男

高橋は「季語地名」でなく「季題地名」としたのは、自らの季語と季題についての認識の違いによるものであるとし、巻頭の「口上」でその違いを述べている。即ち、季語と季題はどちらも季のことではあるが、季語は季物や季節現象を主として季感として捉えたことばで、季に重きを置き、狭い。それに対して季題は季感を超えて季の発生する

風土の歴史性や名前(名詞)ということばの母の有する時間構造をも示すもので、ことばに重きを置き、広い。

そして、新興俳句を推進した高屋窓秋、富沢赤黄男、渡辺白泉、西東三鬼や、その系譜に連なる高柳重信、三橋敏雄、鈴木六林男、佐藤鬼房などの作品に季を現わすことばがあるので、それを季語としていわゆる有季俳句に入れてしまうと何か違和をおぼえるが、同じことばを季題と見るならばそのような差し障りは生じない。むしろ季題は広がりを見せ、新しみを加えている。季題観念は古く既に閉ざされた言語空間のように思われているが、季題は今もなお未来に開かれている。この季題の更新性こそが季題の伝統であり、その伝統を革新俳人と言われる人たちが受け継いでいるのであるとする。

季語と季題については同義に用いられる一方で、その相違についてもこれまで様々に論じられて来た。高橋の論は従来のものとは少し視点が異なるが、その分、卓見である。しかし、季のことばの季よりもことばに重きを置くのは高橋の言う「革新俳人」たちだけではなさそうである。

冒頭に夜半と虚子の「瀧」の句を挙げた。「瀧」は夏の季題であるが、橋間石は夜半の句について「作者が流動体の無限の生命力に打たれたところに詩が生れたのであって、強いて夏に因縁づけるなら一種の精神異常という外なからう」と言っている(『俳諧余談』四十三 俳句性について【昭三六・一〇「琴座」所載】)。

閒石の言う所は、同じ箕面瀧(大阪)を詠んだ虚子の句についても当てはまるであろう。『五百句』から『七百

五十句』までを収めた『虚子五句集』（岩波文庫）から「滝」の句を初句索引、季題索引により抽出し、それを元に「ホトトギス」所載の「句日記」まで遡って調べると、虚子の「滝」の句は全部で三十ある。

そこから旅吟でない二句、他に季題のある八句を除いた二十句について月別に詠んだ数を見ると、四月が九句、六月が一句、八月が七句、十一月が三句で、「滝」の季とされる夏に詠んだものは一句しかない。また、俳句では季節を先駆けて詠むことは別に珍しいことではないが、季節が過ぎた秋、冬に詠んだものが半数の十句ある。次は權未知子『季語の底力』の「滝」の中の一節である。

俳句では、少しでも時季が過ぎてしまった句は、句会に出さないのが普通です。「今、この時」が全てであり、過去にしがみつかない、こだわっていられないという性格の文芸です。たとえ、どんなにいい作品だと自慢したくても、季節が過ぎてしまったら、来年まで発表の機会を待たなければなりません。

この有季定型派の鉄則ともいべき内容に、その総本山である筈の虚子が何の頓着もしていない。「そこに滝があるから」詠むのだと言わんばかりの態度であり、それが規則などとは無縁の虚子の「今、この時」なのである。そして、虚子はこれらの句をそれぞれ一年後の「ホトトギス」同月号の「句日記」に発表している。冒頭に挙げた句は昭和二十二年十一月号の「句日記（昭和二十一年十一月）」に掲載され、『六百五十句』に収録されている。

また、冒頭に挙げた「昼寝」の句を皮切りに、虚子の

「季題の方法」をもっと掘り下げて痛快に論じて見せたのが、虚子没後五十年を期に二〇一〇年一月に刊行された仁平勝『虚子の読み方』である。

虚子もまた先の高橋龍のように「季のことは」を「季語」とは言わずに「季題」と言った。仁平の思うに、虚子は季の約束を「題」ではなく「語」と呼び換える発想を嫌ったのであり、彼はその虚子の方法意識を見て取る。少し長くなるが、同書所収の「季題の方法―高浜虚子論」から要約して引用すると凡そ次のようになるであろう。

虚子は俳句に詠む題材を季節の現象に限定したりはしない。季題さえ入っていれば題材は何を詠んでもいい。それが季題の方法であり、即ち「花鳥諷詠の文学」の定義に他ならない。

虚子の季題の方法が近代的な季節感という発想とは無縁であることは、季語信奉者のためにも強調して置きたいと思う。

季題が季節感を表すものでないこと、それ自体は俳諧からの伝統に過ぎない。虚子はその季題に「客観写生」という近代の方法を接木させたのである。

俳句のような短い詩型が写生という方法を用いるとすれば、そこで描写出来ることは高が知れている。一旦は小説を志した虚子にとって、それは多分決定的なことであった。だから虚子は言わば小説におけるディテールを俳句の題材にしようとしたのである。

それは日常的に繰り返されるような平凡なことで良い。むしろ庶民の平凡な生活の一場面に俳諧のものと

は違う近代の風景が表れる筈だ。それが虚子なりに到達した俳句固有のモチーフであった。

虚子にとつて季題とは小説のディテールに普遍性を与えるための要素であった。虚子が信じた季題の普遍性とは、季という題（季節感ではない）の充足する「歴史的連想即ち空想的趣味」のことである。

仁平は同書最終節の「発句から俳句へ」で、虚子の季題は「月」や「花」の定座を例外として季に主題性のない平句の季に近いこと、虚子が切字を余り重視しない発言を繰り返し、また、虚子の俳句自体がしばしば古典的な「切れ」を意図的に避けていることを指摘し、「俳句の近代化にあたって、虚子のもっとも大きな功績は、五七五という定型のなかで発句の格を解体したことだ」とする。

仁平によれば、虚子は作品中に「春雨傘」、「梅雨傘」といった造語を平気で成し、「季題がなければ作れない」（「発句から俳句へ」）という態度である。山下一海『昭和歳時記』を読むと、虚子は「ホトトギス」の総帥として、遍路、セル、甚平、木の葉髪始め、様々な季題の成立、普及に係わっている。

また、昭和十一年二月、虚子は渡仏するが、その途上、早速シンガポールで「熱帯季題」なるものを提唱する。それは熱帯、古倫母、亜典、印度洋、紅海、ニグロ、アラブ、駱駝、鱧など無季としか言いようのないものを多く含む。虚子はそれらを季題とする句を句日記に掲載し、『五百五十句』にも数句を収録する。恐らく、虚子が宇宙旅行をすれば「宇宙季題」さえ考案するのではないか。

そして、欧州各国を歴訪する中で海外における俳句熱に注目した虚子は帰国後、「ホトトギス」十月号に「仏蘭西はいく其他」、十一月号より「外国の俳句」の連載を始める。翌年四月には「俳諧」を創刊し、欧州に加え南米や東南アジアの俳句も紹介している。今日の所謂「世界俳句」の隆盛は虚子の尽力と無縁ではないのである。

俳句のモチーフが季節感を表すことでしかないなら、こんな短い詩はすぐ月並みになるに決まっている。虚子の季題の方法はすくなくとも、そういう月並みの宿命に対抗しようとする手段であった。（仁平勝『虚子の読み方』「季題の方法―高浜虚子論」）

短詩型に託されるのが、日記風の季節感だけだとしたら、たいへんおそまつな話だ。季節感を突きぬけた世界観や宇宙観、あるいは人間観が問われない詩などは、滅亡すればよい。（夏石番矢『現代俳句キーワード―下辞典』「はじめに―季語からキーワードへ」）

虚子の季題の方法とは、要するに季題のキーワード化とすることである。季語に替わるキーワードというものを提唱したのは夏石番矢であるが、この二つの文を読み比べ、また、冒頭に二人の「滝」の句を並べてみると、「守旧派」の虚子と「世界俳句」の番矢と、限りなく遠いようで、案外近いのではないかとも思えるのである。

次は片山由美子「巻頭提言―歳時記を考える」（「角川俳句年鑑二〇〇九年版」）の一節の要約である。

生活実感は歳時記の季節に優先しない。それを前提としない限り、有季俳句は成り立たないのである。現

実の生活実感に即して従来の歳時記の季節の体系を組み替えようという発想は、季語が負って来た本意としての季節感を奪い季語の働きを否定するもので、俳諧以来の俳句の作り方を全く変えてしまうものである。季語の本意としての季節感を排したことは無季俳句の中のキーワードと変わらない。全て日常の認識で済むことばであるとしたら歳時記は要らないのである。

片山はこの前段で、現在の歳時記、季語を考えるには和歌や連歌、俳諧（連句）に立ち戻って確認して置く必要があると言っているが、一句の独立した俳句は既に俳諧と同じではない。また、「もちろん一句における季語の役割は一樣ではない」とも断っており、この論が限定的で狭い、後ろ向きのものであることを自ら明らかにしている。

片山が例に挙げる胡瓜やトマトが夏を代表する野菜であることは誰もが承知している。また、全て日常の認識で済むことばでいいなどとは誰も思っていない。一方で、胡瓜やトマトが一年中出回っていることもまた、紛れもない事実であり、それは一年中必要とされているからでもある。そして、既に次のような佳句がある。

瓜きざむやめたく思ふまで刻む

子の為に朝餉夕餉のトマト汁

季節もその本意も本来、人々の生活実感の中で生まれ、

育まれ、変遷をして今日の姿がある。高橋龍の言うように

季節は今もなお未来に開かれているのであり、この季節の

更新性こそが季節の伝統なのである。既に先の渡仏途上、

虚子は南支那海の更衣や赤道の夕焼、スマトラの稲妻（何

れも三月）などを詠んでいる。海外詠が当たり前になり、世界俳句が盛んな今、季節は世界にも開かれている。

虚子は新興俳句全盛の昭和十一年一月、「従来の俳諧の平句にうたっている人事句の如きも、今日では大概俳句に取り入れてうたっておる。俳句というものが縦横無尽にその勢力を張って大概なものを取り入れておる」と言っている（岩波文庫版『俳談』「俳句という語」）。

仁平が虚子について指摘したことは、虚子のみならず俳句界の趨勢でもあることを、虚子は既にこの時点ではつきりと認識していた。片山のこだわる西瓜や海女、鮑、鮫など歳時記により季の異なる季節があるが、それで俳句界に特に混乱は生じていない。俳人たちはそんな狭い世界で句作も鑑賞もしてはいないからである。恐らくは片山自身を含めて。有季俳句であれ、俳句であれ、片山の言う前提など係わりなく、しっかりと成り立っているのである。

冒頭に赤黄男の句を挙げたが、彼のアフォリズム『クロノスの舌』の最後を飾る次のことばは、これまで述べたことを締め括るにふさわしいものであろう。

根源論も俳人論も、無季俳句論、社会性論議も、僕には無用である。僕はただ、ひとりの人間が、憤りの果てから、虚妄の座から、涙を通し、哀歎を越えて、ついにひろびろとした大気の中で思い切り呼吸することが出来ればと、そのみを悲願するだけだ。

私は俳人を信じない。だからこそ期待する。

続エロイム、エッサイム

―滝と涼感―

前田霧人

「エロイム、エッサイム」(以下、「正編」と略記)で紹介した権未知子『季語の底力』の「滝」の章には、次の三句が扉に掲げられ、三つのことが強調されている。

- ① 神にませばまこと美はし那智の滝 高浜 虚子
- ② 滝の上に水現れて落ちにけり 後藤 夜半
- ③ 滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋桜子

(一) 滝は一年中あるが、噴水、泉などと同じく、「涼感と呼ぶ」という理由で夏の季題と認定された。

(二) この感覚は飽くまでも俳句でのものであり、お隣の短歌では、そして他のジャンルの文芸でも恐らく、滝が夏のものだという意識は薄いであらう。

(三) 俳句における滝は、夜の景はほとんどない。炎暑を抜けて、眼前に現れた滝の飛沫の爽涼感、即ち昼の景だと思った方が「涼感と呼ぶ」とされる滝の季題としての存在理由が良く生かされるからである。

また、次は坪内稔典が「e 船団ホームページ」の「この一句」で推賞する夜半の子、後藤比奈夫の句である。

- ④ 滝落ちて箕面は空の深きところ 後藤比奈夫
- ⑤ 見上げれば空へ逃げゆく滝なりし 〃

一方、夏石番矢『現代俳句キーワード辞典』にも「滝」の項がある。次はその一節であるが、滝が涼感と呼ぶこと、夏の季題であることの記載は一切ない。

滝は、元来は「たぎ」と発音した。たぎたぎし、激つ、滾ると同じ語源で、高低の差のはげしい場所、そしてそこを流れる水を指す。水平で安定した姿を示すことの多い水は、滝においてはダイナミックに垂直で劇的に不安定となる。

例句は先の①と次の⑥、⑦、⑧の計四句。また、あとの⑨、⑩は正編に紹介したもので、⑨は番矢の自信作、⑩は吉本伊智朗の推賞する一句である。

- ⑥ 金輪際此合掌を滝打てり 川端 茅舎
- ⑦ ひと通るたびに応へて春の滝 飯田 龍太
- ⑧ 妻ねむらせ部屋中に滝落してみる 阿部 完市
- ⑨ 未来より滝を吹き割る風来たる 夏石 番矢
- ⑩ 顛落す水のかたまり滝の中 高浜 虚子

以上十句の②、⑩については正編に述べたが、④、⑤もまた「強いて夏に因縁づけるなら一種の精神異常という外なかるう」(橋間石『俳諧余談』)というものである。

また、『五百句』所収の①は晩春の四月十日、③はその二十一年後、作者は異なるが同じ四月中旬、同じ那智の滝で詠まれたものである。秋桜子は『自選自解水原秋桜子句集』で、その時のことを次のように述べている。

滝の左右につづく原始林は大きな杉を主としているが、その芽が伸びたばかりで、全体が群青色である。

それに山桜が咲きまじって、大和絵そのままの色彩であった。(略)私に幸いしたのは、その日の水量が豊富で、とどろき落ちる音が、魂を揺るほどに感じられたことである。

そして、⑥は晩秋の十月、生駒山の滝行場「岩谷滝」で詠まれたもので、「ホトトギス」昭和十一年一月号雑誌の巻頭句である(岩下鱧『茅舎浄土巡礼』)。

即ち、權未知子の言にも拘わらず、これら俳人たちが推奨する「滝」の名句秀吟で「涼感」を詠んだものは、ただの一句もない。強いて言えば、皮肉にも「夜の景」を詠んだ⑧が最も「涼感を呼ぶ」気がするのである。

かくのごとく、季語制度は、それが所詮、季感を俳句の感動の不可欠要素となすところの観念にもとづく筈のものであるにもかかわらず、他方実際の作品において、季感をもたないものをも生み出すという矛盾を有することによって、必然に崩壊すべき運命をもつものである。(渡辺白泉「季語の作用と無季俳句」上、下「句と評論」昭和十年九、十月号)

しかし、季語制度は崩壊などしていない。益々盛んである。それは白泉の指摘した矛盾こそが実は季語制度の拠って立つ所であり、その根幹であるからである。

先ずその言葉の「季感」なるものに着目して、ある特定の季節の季題として定め、歳時記に納める。その上で、あとは「季題さえ入っていれば、題材は季節の現象に限定せず、何を詠んでもいい」というのが正編で述べた虚子の、

そして広く俳句界で行われている「季題の方法」であり、季語制度というものの実態なのである。

權未知子の言うように、滝は夏の季語という感覚が暑さを凌ぐための庶民の工夫に由来するのであれば、また、正編で紹介した片山由美子の論にあるように、現在の季語を考えるには和歌や連歌、俳諧(連句)に立ち戻って確認して置く必要がある程の関係であるのなら、俳句と短歌や他の文芸で言葉の感覚に違いなどある筈がない。

違いがあるのは、俳諧の発句から未だに乳離れの出来な旧態依然とした論に立脚したまま、本音と立前の矛盾があるいは覆い隠し、あるいは居直り、芭蕉の時代の三、四倍の季題数に膨れ上がった歳時記と共に肥大を続ける季語制度の有無に他ならない。

季語は無限に増やしていったらいいと思う。そうしたら、季語も普通の言葉も一緒になってくる。そこで本当の季語が残ってくるように思いますね。

ぼくには有季と無季との国境がない。無国境主義者です。最後にいちばんいいのは、地球が一つになって、地球国を作ったらええ、共生するためです。(鈴木六林男「季語はどんどん増やせばいい」(証言・昭和の俳句「上」))

季語制度の名の下に白泉の言う「季感を有せず、季語を有する無季俳句」を作り続ける有季国と無季、超季国の境は既に臆である。先達、鈴木六林男の言葉は俳句世界の未来について様々な示唆を与えてくれるのである。

続々エロイム、エツサイム

—海女と遊覧船—

前田霧人

海女沈む海に遊覧船浮かむ

高浜 虚子

昭和二十三年四月、虚子が伊勢志摩で詠み「句日記」と『六百五十句』に収録されたこの句が「ホトトギス」で最初に「海女」を季題とした句であると、二〇〇九年一月、「海女沈む」（「新歳時記通信」第三号）に書いた所、直ぐに次のような反論が来た。

虚子は「遊覧船」を夏の季題「船遊」と考えていたと思われます。因みに「五句集」の編者はそのつもりで季題索引は作られているようです。（本井英私信）早速『六百五十句』を収めた『虚子五句集』（岩波文庫）の「季題索引」を参照すると、確かに「フナアソビ（船遊）」の項にこの句の掲載頁がある。

また、虚子自選による『虚子句集』（岩波文庫）にも、この句は「六百五十句時代」の「夏」、季題「船遊」の所に掲載されており、この限りにおいて、本井の指摘はその通りである。

一方で、「船遊」は『通俗志』（一七一九年序）以来の季題であるが、私見では、現在に至るまで唯一の例外を除き「遊覧船」を傍題に掲げる歳時記はなく、例句に至って

は皆無である。『広辞苑』、齋藤慎爾他編『必携季語秀句用字用例辞典』なども、「遊覧船」は季題「船遊」と區別して「遊覧」の項に別掲し、無季の扱いである。

唯一の例外とは、志摩芳次郎が『波郷編現代俳句歳時記』（一九六三年、番町書房）と『入門俳句歳時記』（一九七七年、大陸書房）に書いた、一字一句違わない同文の「^{ふなあそ}船遊び」解説である。次の文中、ゴシック体になっているのが傍題の証であるが、「遊覧船」の例句はない。

納涼のために、船を水上に浮かべて遊ぶこと。夏になると隅田川の水上市バスや、東京湾めぐりの遊覧船に乗る人がふえる。なお、全国各地にこの種の観光客相手の遊覧船が運行される。遊船。

しかし、この解説も、観光客相手に一年中運行される遊覧船のうち「夏、納涼のために」遊ぶものが「船遊」であり、それがこの季題の「本意」であることをむしろ明確に述べているのであり、虚子編『新歳時記』、稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』を含め、全ての歳時記の「船遊」解説は「夏、納涼のために」で古今とも一致している。

また、「生活実感」としても『平成19年(度)全国観光動向』（日本観光協会編）などによれば、全国各地の遊覧船利用者数は行楽シーズンに合わせて盆休期の八月、あるいは紅葉期の十月、十一月にピークを迎え、三カ月の合計でも秋（八月〜十月）が夏（五月〜七月）を上回っている。

本井は、私宛私信に先立つ文献で、私信と同様の見解を披露した上で、更に次のように述べている。

厳密に考えれば「無季」の句を虚子は選んでいる。一例を挙げれば、「海女」という季題は虚子存命中、結局『歳時記』に取り上げられることはなかった。つまり三省堂の『新歳時記』には現在も収録されていない(汀子編『ホトトギス歳時記』に至って収録された)。(「無季俳句へのエール」『Series 俳句世界3 無季俳句の遠心力』、一九九七年、雄山閣出版)

しかし、虚子は本井の指摘より四年早い昭和二十三年九月の「ホトトギス」雑詠で「海女」以外に季題のない句(作者は伊勢の人)を初めて選び、その数は年月を追うごとに増加する。同年四月の伊勢志摩の旅を切っ掛けに虚子が「海女」を新しい季題として認知したことは、これでは明白である(「海女沈む」『新歳時記通信』第三号)。

それでは何故、最後まで「海女」は虚子編『新歳時記』に収録されなかったのか。事実は単純である。

「改版に際して」、「再改版に際して」を参照すれば分かるように、『新歳時記』の季題や例句の増補改訂は「ホトトギス雑詠選集」と不即不離の関係にある。しかし、虚子は「海女」がまだ季題として認知されない昭和二十年三月号までの雑詠選集予選稿は遣り遂げたが、あとは未了のまま昭和三十四年に逝ってしまったのである。

稲畑汀子『定本虚子百句』(角川SSC)は「海女として陸こそよけれ桃の花」の項に、伊勢志摩周遊の旅で書き留めた「海女」の句で「虚子が『六百五十句』の中に入集させたのは結果的に揚句一句のみであった」とする。こ

うして忘れられた冒頭の虚子の句は「海女」を季題として収録した稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』の「海女」の項にも「船遊」の項にも例句として採用されていない。

また、『図説俳句大歳時記』(角川書店)、『カラー図説日本大歳時記』(講談社)、『角川俳句大歳時記』(角川学芸出版)、『平井照敏編『新歳時記』(河出文庫)などは虚子の句を「海女」例句として掲載する。虚子の「遊覧船」は今もなお、歳時記の海を彷徨しているのである。

祇王寺の留守の扉や推せば開く 高浜 虚子
この有名な無季の句について、本井は先の文で次のように述べている。

何万句に一句を、さも重大事として、それまでの「有季定型」や「花鳥諷詠」の主張をすべてひっくり返す問題として、かまびすしく言挙げする方がおかしいのである。

しかし、正、続の「エロイム、エッサイム」で述べたように、本井の言う「有季」や「花鳥諷詠」の主張を引っ繰り返しているのは何万句に一句ではない、他ならぬ虚子の、そして広く俳句界で行われている「季題の方法」であり、現行の季語制度そのものである。

言葉は、季題であるか否かの前に、まず言葉そのものである。歳時記に載っているか否かは末節のことである。そして、「海女」と「遊覧船」のどちらが歳時記に載っているかといまいと、季題であろうとなかろうと、虚子の句の作品としての価値は少しも変わることはないのである。

三十分と三百年

前田霧人

調べれば三十分で分かる季題の誤謬が、十七世紀末より現在に至るまで、三百年以上に渡って受け継がれているという嘘のような本当の話がある。

二〇〇八年、月刊「俳句界」四月号の「特集：辞典・言葉の宝庫を楽しむ」を読み、榎本好宏、復本一郎両氏の推奨する『大漢和辞典』全十三巻（諸橋轍次著、大修館書店、以下、『大漢和』と略記）を古本屋で買った。

目的は歳時記の季題に出て来る漢語を調べるためであるが、買ったから早速使ってみたくなるのが人の常である。時は夏、『角川俳句大歳時記 夏』の最初にある時候季題「夏」の傍題「朱夏」から順に調べて行くが、最後の傍題「蒸炒」が『大漢和』のどこにも記載がない。

『大漢和』巻九の「蒸」の項には「蒸炒」がない代わりに「蒸炊」の記載がある。解説は次の通りである。

むして飯をたく。（略）蒸暑いことの喩。「韓愈、鄭羣贈_レ簞詩」自_二從五月_一困_二暑湿_一如下_二坐_二深甑_一遭_中蒸炊_上。

一方、近世歳時記の『増補俳諧歳時記栞草』（曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注、岩波文庫）の「夏之部」に「蒸炒」が掲載され、次の記載がある。

「韓文」自_二從五月_一困_二暑湿_一、如下_二坐_二深甑_一遭_中蒸炒_上。

『大漢和』と『増補俳諧歳時記栞草』の引用漢文を見比べると、最後の「蒸炊」と「蒸炒」だけが見事に相違している。調べを始めてからここまで三十分、「伝家の宝刀」『大漢和』の実力を考えると、どちらが正しいのか、ほぼ明白なのであるが、念のため原典に当たってみる。

『大漢和』にあるように、引用漢文は韓愈の詩「鄭羣贈簞」の一節である。韓愈は柳宗元と共に韓柳と並称される唐の文章家・詩人。ネット検索によれば、当該の詩は『全唐詩』卷三三九―二にあり、図書館の中国文献『全唐詩』（第十冊、中華書局）共々、次の一節である。

鄭羣贈簞 鄭羣、簞を贈る

自從五月困暑湿。五月暑湿に困_レより、如坐深甑遭蒸炊。深甑に坐して、蒸炊に遭_レうが如し。

季題「夏」の傍題「蒸炒」は誤りで、正しくは「蒸炊」であることがこれで分かる。「鄭羣」は人名、「簞」は「簞」、「甑」は「甑」、後の「蒸籠」で、「五月の湿っぽくて暑い時分には、丁度、甑の中に坐って居て、下から蒸し炊_レがれると同じである。」の意である（書下し文、

詩意とも、久保天随註解『韓退之全詩集 上巻』による。

「甌こしきに坐するが如し」は「夏の暑さのきびしいこと」をいう慣用句として、『広辞苑』などにも記載がある。

近世の歳時記類に「蒸炒せいしょう」(あるいは「蒸砂せいさ」)が掲載されるのは『俳諧大成新式はいげたいせいしんしき』(鷺水編、一六九八、元禄十一年刊)が最初であり、「蒸炒せいしょう」(ヨウヤ) 韓文ニ出タリ夏ノアツキナリ」の記載がある。その後、『通俗志つうぞくし』、『改式大成清鈔たいせいきやうな』、『誹諧手挑灯集はいげたいていとうしんしゅう』、『華実年浪草かじつとしなみぐさ』、『俳諧歳時記はいげたいさいじ』、『季引席用集きびきせきやうしゅう』と掲載され、先の『増補俳諧歳時記葉草ぜいしやう』に至る(『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』・『近世後期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』、尾形仿・小林祥次郎共編、勉誠社)。

現代の歳時記で「夏」の傍題「蒸炒せいしょう」の掲載があるのは大歳時記に限られるであろうが、『大漢和』の刊行が一九六〇年であるから、それから五十年、数々の大歳時記の編者、執筆者、そして大勢の読者の誰一人として『大漢和』を参照する者はいなかったのか。私は大学の教養で「漢文」の単位を落とす程の理系の劣等生である。難しい漢語を見ると辞書を引かずには居れない。

「蒸炒せいしょう」はマイナーな季題であるが、メジャーな季題にもこんな例は多い。「日本では蘭といえは春蘭が主で、秋蘭はシナ蘭が主で、日本には自生しない」(山本健吉『基本季語五〇〇選』)という「蘭」が「藤袴ふじばかま」との混同で未

だに秋の季題となつているなども、その一例である。

「蘭」を春季とするなどの『現代俳句歳時記』(現代俳句協会編、学習研究社)が刊行された時、「伝統破壊の暴挙」(『季語改革論争』「日本経済新聞」二〇〇四年六月二十六日付)と叫ぶ人たちが大勢いた。しかし、「伝統」などというものの裏には、落語に出て来る「横丁のご隠居」的ないい加減な「学問」が案外に横行しているのである。

『大漢和』を買った時、周囲に笑われた。そんなもう一書に『世界大博物図鑑』全七巻(荒俣宏著、平凡社)があるが、第一巻「蟲類」の「コオロギ」の項には「上代の〈こおろぎ〉が今のキリギリスを指すという説はあまり支持できない」との記載がある。同項には、この他にも「コオロギ合戦」、「こおろぎ橋」など興味深い記述と、古今東西の貴重なカラー図版が多数集録されている。

「鬼」の女編集者の叱咤と千二、三百枚の原稿量、それに何万回と繰り返し返した大歳時記や大辞典を右手で持ち上げる作業の結果、右手の橈骨神経麻痺に陥つた。全治九か月の見立てを医者から貰った。(榎本好宏『季語の来歴』「あとがき」)

ここまででは別としても、歳時記の編者、執筆者は他書の孫引きに終始するのではなく、著名な辞典、図鑑の何冊かは参照するくらいの謙虚さがあって然るべきだと思うのである。

(二〇一〇年四月刊「連衆」第56号より転載)

血が凍りつく ―「霞と霧」の考察を通して―

前田霧人

昨年末、「新撰²¹ 竟宴^{きやうえん}」のシンポジウム第一部で「血が凍りつく」とのフレーズが『新撰21』(邑書林)編者の一人、筑紫磐井氏と新鋭俳人二十一名の一人に選ばれた村上鞆彦氏との間のキーワードとして会場を大いに沸かせた。ある出席者の話によると、両者とも俳句界のエリートだけあって、実に優雅な遣り取りであったという。

しかし、その一方で、俳句界では万人の財産である季語(季題)に対して優雅ではない、正に「血が凍りつく歳時記検定の企て」が着々と進行していた。

長谷川耀氏が代表を務めるNPO法人「季語と歳時記の会」が今年四月、東京都渋谷区青山の「こどもの城」で第一回公開歳時記検定を行うと共に、会が監修する「歳時記検定」を総合誌「俳句」で四月から連載することが、一月の新聞各紙に報道されたのである。

会のサイト「季語と歳時記」には①インターネット歳時記「季語と歳時記」の運営、②山桜一〇〇万本植樹計画、③歳時記学の構築(「歳時記検定」の実施)の三つの活動

が会の柱であり、「歳時記検定」が会の登録商標(二〇〇八年十二月登録)であることが明記されている。

これら三つの活動全般については、いち早く二年前の二〇〇八年五月、水野真由美氏が「鬘T A T E G A M I」27号の俳句時評「桜の下で『桜』を思う―季語と歳時記の会」の方法論」で批判を行っているので、ここでは「歳時記検定」について主に論じることとする。

また、この問題には俳人と総合誌の双方が関与しているのであるが、ここでは俳人の方に論点を限ることとする。昨今の出版事情を考えると、かつての山本健吉や高柳重信に匹敵する文学精神を持つ編集者を得なければ、総合誌と雖も生き残りを賭けて「歳時記検定」のような企画に飛び付くのはむしろ当然のことと思われるからである。

先ず「検定」とは「一定の基準に照らして検査し、合格・不合格・価値・資格などを決定すること」(『広辞苑』)である。即ち「検定」には、する側とされる側の主従関係が発生する。検定の側に理想の人材を得れば、それに従することは可なりとも言えるが、そのような人は「歳時記検定」という凡そ文学の本質と掛け離れた企てには参画しない。先の「こどもの城」、「登録商標」の語が何よりも、その「子供だましの非文学性」を象徴しているのである。

次に「歳時記検定」の監修者、長谷川耀氏の歳時記観の一端を「角川俳句年鑑二〇一〇年版」所収「暮と新年―現代の歳時記の問題点―」で見ることとする。同文で氏は二

つの提言をしている。第一は「太陽暦への対応」として、従来の春夏秋冬と新年の五部構成は「暮と新年の分断」が問題であり、それを解消する方法は一つ、仲冬から暮の季語を分離し新年と合わせて「暮・新年の部」を立て、春夏秋冬と暮・新年の五部構成とすることであると云う。

しかし、氏の方法にも問題は多い。また、時候・天文等の区分を撤廃し、月次つきなみに一月の「去年今年」から始め十二月の「除夜の鐘」で終える方式の虚子編『新歳時記』や『ホトトギス新歳時記』、「歳末」の部を立てる一連の山本健吉編歳時記が既にあるなど、方法は一つではない。

第二は「季語解説の問題」で、氏は文学的解説と、補足に過ぎない科学的解説の相違による「混乱」や「科学の横暴」を防ぐため「解説」は文学的記述に限り、科学的解説は「実証的見解」として分離すべきであると言う。

氏は「季語は人間の想像力が生み出したものであって、科学によって作り出されたものではない」と断じる。しかし、「人間の想像力」は多彩であり、氏の言う「文学」と「科学」の間で、人により時代により様々のスタンスが可能である。そして、その大らかな自由度の中にこそ独自の佳句を生み出す豊潤な土壌かちが醸かもされるのではないか。

また、かつて山本健吉が自ら初めてかちの歳時記『新俳句歳時記』を世に問うた時、彼は「編者のことば」で従来の幼稚な年中行事その他の解説、風の名や鳥類・魚類その他博物全般のでたらめな取扱いなど自然科学の現象解説の不備を指摘し、民俗学始め当時の学問の成果の上に立ち改訂し

たことを述べている。今日の歳時記がその成果に負う所は大きく、一方で、その彼を以てしても集大成である『最新俳句歳時記』の季語解説には未だ不備が散見される。

昨年十二月、高橋龍氏が小冊子「龍年纂愛読者御礼配り・郵便番号簿季題地名一覽」を発行し「龍年纂」の終刊を告げた。巻頭の「口上」はそれ自体卓抜な季題論であるが、誌中に次のような印象的な言葉が付されている。

伝承とはたんなる引き渡しではない。それは原初的なものを「見失わないように」見守ることであり、すでに語られた言語の新たな可能性を保護することである。すでに語られた言語それ自体が語られざるものを含み、それを贈るのである。言語の伝承は言語自体によって遂行される。しかもその遂行は、言語が人間に次のことを要求するというしかたでなされる。すなわち、人間がとっておかれた言語から世界を新たに言い、そのことによつていまだなお見られていないものを輝きにもたらさねばならないのである。これこそが詩人の使命である。(M・ハイデッガー「伝承された言語と技術的な言語」『技術への問い』関口浩訳・平凡社)

この「詩人の使命」を俳人が共有し、俳句を真に文学たらしめるのか。あるいは「歳時記検定準拠」と刻印された歳時記が書店に山積みされるなどの事態が、これから次々と起こるのか。「歳時記検定」の問題は、俳句界に示された一枚のリトマス試験紙である。

ここからは、季語（季題）の具体例「霞と霧」の考察を通して「歳時記検定」について言及することとする。

まず「文学的な作句本位の歳時記」を掲げる虚子編『新歳時記』は春の「霞」、秋の「霧」に「冬霞」というシンプルな構成で、後継の稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』はそれに「夏霞」、「夏霧」（傍題に「じり」）を加える。

また、それらの「霧」解説にある「霞も霧も現象的には同じで、昔は区別がなかったようであるが、今では春は霞、秋は霧と定まった。」とのフレーズは、現在も多くの歳時記が採用するものである。

次に、山本健吉編『最新俳句歳時記』（文藝春秋）は虚子編『新歳時記』に夏の「海霧」、「山霧」、冬の「寒霧」（傍題に「冬の霧」）、「スモッグ」、新年の「初霞」を加えた構成で、秋の「霧」解説も同様のフレーズである。しかし、春の「霞」解説は非常に興味深い内容で、そのベースとなった彼の「季の詞についてのノート」である『ことばの歳時記』（文藝春秋）の記述と合わせてここに紹介する。

彼は先ず霞、霧は共に、空气中に微少な水滴が多く生じ遠方がぼんやりして見えなくなる現象であり、気象学では視程が一キロ未満のものを「霧」、霧の薄いものを「霏」とし、「霞」は気象用語ではないことを述べる。

その上で、一般に霞と霧の区別は気分的には誰にでも分っていて、霧と言えば目の前に深く立ちこめるが、霞は遠く微かなもの、ほのかなやさしい感じのものであると述

べる。一方で霞と霧は学問的に同じ現象であるとしながら、他方ではその違いを明確に指摘しているのである。

また、万葉時代には霞と霧をまだ季節的に言い分けていた訳でないが、同時に「霞立つ」が春の枕詞のように感じ出され、霞を春の景物として感じ出して来て、春と霞との関連が不可分のものになって来たのであると解説する。

そして、春の大和路を歩くと「たたなづく青垣」をなしている」と詠まれた四方の山並みが全て霞にぼやけて、三山も二上も三輪山も薄い帳に覆われ、少し遠くからだと姿を隠してしまうが、こうした大和盆地や続く平安京の山城盆地の地形が日本人の春霞趣味を形作り、それを全国に風雅に遊ぶ人士が模倣したのであろうと推論する。

一方、『角川俳句大歳時記』や「季語と歳時記の会」のインターネット歳時記などは全ての季節に霞を、夏、秋、冬の全てに霧を立項する。これは何も今に始まったことではなく、虚子編『新歳時記』の一年前、昭和八年刊の『俳諧歳時記』（改造社）なども同じ構成である。

更に金子兜太編の『現代俳句歳時記』（千曲秀版社）、共編の『現代歳時記』（成星出版）、現代俳句協会編『現代俳句歳時記』（学習研究社）などは春にも霧を立項する。

このように霞と霧だけを採用してみても、歳時記にはこれだけの例が存在する。また、一般に同じ現象であるとされる霞と霧が実際は違うものであることを、昭和の初めから現在に至るまで、多くの俳人が認識していたのである。そして、ここで長谷川権氏の言う「実証的見解」として

の気象学の登場である。天気検定公式テキスト『なるほど！お天気学』、平井信行著『雑学読本 NHK天気質問箱』、倉嶋厚編『おもしろ気象学』、平凡社版『気象の事典』、『理科年表』などを参照し、以下にその概要を述べる。

まず、霞と霧は同じものを季節で言い分けていると思いがちであるが、実は違う。霞は空気中に浮かぶ微少な粒子のために遠くがはつきりと見えない現象を言うが、その成因は薄い層雲、霧、靄のような水滴だけでなく、煙霧の因となる煤煙、排気ガス、砂埃、黄砂、花粉、火山性微塵、海洋起源の塩分など多岐にわたる。そのため正確な気象用語として定義付けされていないのであり、霞は霧とは概念の異なる現象として気象学的にも認知されている。

また、霧は一年中発生し、海上では春から夏、盆地などの内陸では秋から冬に多く発生する。先ず、広島、下関など瀬戸内海沿岸では三月から七月に掛けて海霧（前線霧）が、そして、根室、釧路、宮古、銚子など、北海道から東北、関東地方の太平洋側の地域では四月から八月に掛けて海霧（移流霧）が多く発生する。

一方、内陸では秋から冬に盆地霧（放射霧）が多く発生し、そのピークは山形、飯田で十月、高山で十月から十一月、奈良で十一月、京都で十二月などである。

また、山霧の多い軽井沢では夏から秋をピークに、一年間の霧日数が一四〇日近くにも及び、富士山などを除けば日本で一番霧の多い所である。そして、東京や大阪などの

都市霧は秋から冬に多いが、この四十年間で大都市及びその周辺を中心に霧日数は激減しており、都市化や温暖化などによる気象変動はこんな所にも現れている。

『広辞苑』によれば「実証的」とは「単に思考によって論証するのではなく、経験的事実の観察・実験によって積極的に証明されるさま」である。季語を生み出す「人間の想像力」が「経験的事実の観察」に無縁である筈もなく、むしろ「文学的解説」と「実証的見解」の積極的融合なくしては、満足な季語解説など成し得ないのである。

そして、先の山本健吉の文学的解説と気象学などによる実証的見解とを合わせれば、虚子編『新歳時記』から現代俳句協会編『現代俳句歳時記』まで、多様な歳時記のそれぞれに意義があり、どれが正しく、どれが誤りというものではないことが良く分かるであろう。実際、一般の俳人は複数の歳時記を所有し、自在に使い分けている。

あるいは「歳時記検定」はこれから俳句を始めようとする、または始めたばかりの初心者を中心ターゲットとしているのかも知れない。

しかし、「三つ子の魂百まで」、まだ自らの俳句観を確立出来ていない初心の段階で、特定の個人や団体による「検定」の洗礼を受けた俳人が大量に排出されるならば、筑紫磐井氏だけでなく、俳句界全体の「血が凍りつく」のは、そう遠い将来のことではないであろう。

(二〇〇九年六月刊「木靈句会報」第79号より転載)

雀の四季

前田霧人

北原白秋は「全く、雀くらい人間と深い交渉を持った小鳥はありません。それは親しみ深いものです。いや、親しみ深いと云うよりも、雀は人間なしには全く生きていられない。それほど雀は人間離れのしない小鳥なのです。」

(*1)と書いている。雀は人家周辺には外敵が安易に接近しないこと、食物や営巣場所に恵まれていることを知っている。一方で、雀に取って人くらい危険な存在はない。

「人に依存すれども、決して信用しない」との戦略で、繁殖に必要な食、住、安全の三点セットを確保し、確固たる庶民の地位を構築して、したたかに逞しく生きる雀は弱者の立場を代弁する「民衆の鳥」である(*3)。

人も蟻も雀も犬も原爆忌

藤松 遊子

市井の人、一茶は雀を捕まえ飼育もして庶民の文学、俳句で民衆の鳥、雀を詠んだ。「門前雀羅を張る」という言葉がある。「訪ねる人がないので、門前は雀を捕らえる羅を張ることが出来るほど寂しい。」(『広辞苑』)との意である。

雀とる罟の番して冬籠

一 茶

慈悲すれば糞をする也雀の子

雀子を遊ばせておく暈哉

雀の春は俳句と同じで、立春から始まる。冬の間は低い

目立たない声でしか鳴かなかつた雀の声が、この頃になると急に力強さを増し艶を帯びて来る。陰暦の元日は平均すれば陽暦の立春頃に当たると。当時はお屠蘇気分の人間だけでなく「初雀」も元氣であった。

元日や晴れて雀のものがたり

嵐 雪

三月に入ると娘一羽に婿八羽、雌を巡って雄の喧嘩が始まる。番が形成されると、今度は巢作りである。営巣場所の決定権は雌にあり、巢材には何でもが使われる。

雀の巢かの紅糸をまじへをらむ

橋本多佳子

雄が雌に呼び掛ける闇魔蟋蟀に似た優しい綺麗な声が聞こえると交尾である。他の野鳥の交わりは余り人目に触れることはないが、雀の交尾は足場の良い棟瓦やテレビのアンテナの上など、目立つ場所で堂々と行われる。

雌雀に乗り降り乗り降り実には五月

西東 三鬼

雀は一回の繁殖で巢作り、産卵、抱卵、育雛、巣立後の給餌に教育と、最低でも約五十日間を要する。年二回繁殖するのは三十五%未満とのデータがある(*4)。雀を他の小鳥と見分けるコツは腹全体が白っぽくて模様がなく、頬に黒斑のあることであるが、この黒斑の薄いのが子雀である。大きさは親雀と変わらない(*7)。子雀や親雀を詠んだ句は多い。ユニークなものもある。

子雀のへの字の口や飛去れり

川崎 展宏

「羽抜鳥」は晩夏の季語であるが、雀の換羽は七月末から九月末頃に掛けてである(*2)から、もう秋である。黄昏時の色に擬され、敗戦の翌春、波郷が焦土の色と見た雀の羽色は鮮やかに、見違えるように美しくなる。

二日はや雀色時人恋し

志摩芳次郎

はこべらや焦土のいろの雀ども

石田 波郷

秋は「稲雀」の季節である。雀は農作物の害鳥とされる一方で、大量の害虫や雑草の種を食べ駆除してくれる。かつて中国では雀を含む四害追放運動が展開されたが、その後、国中が凶作に見舞われ、雀は直ぐに除外された経緯がある。一九九九年度の熊本県の調査でも、雀の被害は鴉の四分の一度度、鳥全体の十四％に止まる（*4）。

稲すずめ茶の木晶や逃げ処

芭蕉

雀の運命に逃げ所はない。巢立つことの出来る雛の数は卵の半分である。それでも毎年親鳥の二倍の数が巢立つて行く。しかし、人家の側にある既存の罫ねぐらはほぼ埋まっているから、若鳥たちは昼間は田畑に大群を成し、夜は街路樹などに集団で営巢し罫とする。

灯るまで雀かしまし門柳

角川 源義

七十二候の寒露二候（陽曆十月中旬）に「雀大水に入り蛤と為る」がある。これは言い伝えであるが、実際に十一月に入ると、こうした若鳥の群れは縄張りの空席を求め、温暖な地方などへ漂鳥として長距離移動し、姿を消してしまふ。蛤となる訳ではないが、海を渡ることも報告されている（*3）。途中、病気や悪天候、飢えや外敵などで、翌年の繁殖期まで生き続けるものは少ない。運良く成鳥となれた雀もその平均余命は二年未満である（*4）。蛤となるうとなるまいと、前途は多難なのである。

蛤とならざるをいたみ菊の露

夏目 漱石

雀蛤と化して食はれけるかも

榎 未知子

しかし、この豊富な若鳥の予備軍に支えられて地域個体が維持され、遺伝子の拡散と交流、新天地開拓により種の保存に貢献するというから自然界は奥が深い（*3）。そして、晩冬は「寒雀」である。一句目は久女が「餌して」の句でブレイクする前、二句目は先の「雌雀」の句と合わせ、「地上に墜ちたゼウス」（石川桂郎『俳人風狂列伝』）と評された三鬼らしさが彷彿とする。感銘の深い「寒雀」であるが、ここまで来れば春はもう近い。

けふの糧に幸足る汝や寒雀

杉田 久女

天の国いよいよ遠し寒雀

西東 三鬼

今、雀を巡る環境は先行き不安な時を迎えている。世界の雀界に君臨する家雀の日本進出が遂に一九九〇年、北海道の利尻島で発覚した（*6）。繁殖して既存種を脅かすまでには至っていないが、日本の雀はこの二十年で少なくとも半減、多く見積もれば八割減とも推定される（立教大動物生態学研究室ホームページ・三上修博士）。また、家雀の故郷英国でも家雀の激減が危惧されている。何れも繁殖に必要な食・住環境の悪化が原因と見られる（*5）。

参考文献

- *1 北原 白秋『雀の生活』
- *2 小林清之介『新編・スズメの四季』
- *3 唐沢 孝一『スズメのお宿は街のなか』
- *4 大田 眞也『スズメ百態面白帳』
- *5 国松 俊英『スズメの大研究』
- *6 佐野 昌男『わたしのスズメ研究』
- *7 安西 英明『スズメの少子化、カラスのいじめ』

(二〇〇九年七月刊「月刊俳句界」より転載)

鳳作私見

前田霧人

しんしんと肺碧きまで海のたぐひ
私と篠原鳳作との付き合いは二十の時にこの句に魅せられて以来であるから、もう四十年になる。今熱中している歳時記論も鳳作論のなせる業であるから、それは一生のものになるであろう。

私にとつての鳳作の魅力は、その大らかなロマンティズムと怖れを知らぬ反骨、自由主義精神である。また、そうした鳳作を育んだのは活火山桜島を擁する南国鹿児島風土と両親のDNAである。

鳳作の父は医者で熱心なキリスト教徒であった。父は息子に何も強制はしなかったが、様々な社会的圧迫と闘つて来た父の血は鳳作にも流れていた。また、家族の愛情にも包まれて、彼は伸び伸びと育った。

そんな純白な精神は文学青年の好む所である。七高時代の彼は「魂を分けあった」友を得る。新たに発見された当時の画帳には鳳作の句と歌が記されているが、「小雨降る日」とある美しい水彩画に付された歌一首には彼のロマンが彷彿としている。

紅花の咲ける我家に君来むは

明日の午砲すぎひと時の頃

こうして、鳳作は父から受け継いだ敬虔な信仰心と東大法学部政治学科卒で培った唯物観との間で、詩心とユーモアを忘れない生真面目さと、頑でない信仰心を持った大らかな青年に成長して行く。

鳳作の本格的な俳句人生は昭和十一年秋に三十歳で急逝するまでの僅か七年間である。また、それは丁度新興俳句の時代と重なる。

その間、鳳作は主観に目覚め、有季から無季を経て超季へ、花鳥諷詠から機械諷詠を経て信仰心に支えられた生活俳句へと精力的に進化して行く。

一塊の光線となりて働けり

くちづくるときひたすらに眉長き

にぎりしめににぎりしめし掌に何もなき

赤ん坊の蹠まつかに泣きじやくる

みどり子のほひ月よりふと白し

蟻よバラを登りつめても陽が遠い

鳳作の持論は「バイタリティ」、何事にも一生懸命である。それは俳句修行には大いなる力となったが、長身瘦躯、生来虚弱な体質には大きな負担となった。「俳句近代派の詩人」としての可能性を秘めた「蟻よ」の句を残し、彼は突如逝ってしまう。

鳳作は青春性のみ甘んじた作家と思われ勝ちであるが、それは彼の早世がそう見せるだけである。彼は次のように言っている。

人間の鍛練が句の底に光りをたたえる日がくる事を私は望まざるを得ない。其が年と共に段々出てくるの

が本当の俳句―遊びでない俳句と思うのである。

（「松阪の罌堂」「傘火」昭和十一年二月号）

また、生前に企図された傘火自選句集に代表作「海のたび」の句は選ばれていない。鳳作は停滞することなく、常に前を見据えていた。

新興俳句の時代、平畑静塔や渡辺白泉、三谷昭、石橋辰之助らは鳳作を厳しく批評したが、その根底には常に愛惜と激励があった。

そして、鳳作は自分より年少の評者であれ辛口の評であれ、それが心の籠ったものであれば甘んじて受け、自らの糧とした。

鳳作はこれから先の人々は自由主義的に育てたい、「傘火」は「新興派の総合雑誌」というものにしなさいと思つていた（昭和十年十月二十三日付指宿沙丘宛書簡）。

鳳作は「旗艦」の若手と親密に交流した。沙丘とは、今で言う「メル友」であった。その沙丘が特に快く強く印象付けられたのは、鳳作が「狭い結社意識の弊を排して、広く同志と携え、新俳句の建設に邁進しようとする熱情、伝統・新興の境域を超越した是々非々の批評態度、広くおおらかな心情の持主」だということであった。（榎島沙丘「篠原鳳作との交友」「俳句研究」昭和四十六年九月号）。

また、水原秋桜子は「その作には何か魅力があつていつも心がけて読んでいたのであつた。私をして言わしむれば無季陣中第一の作者であつた。」と鳳作を惜しんだ（「俳句」「文芸春秋」昭和十一年十一月号）。

次は拙著『鳳作の季節』（沖積舎）に寄せられた感想で最

も注目された鳳作の言葉である。

季感ある場合は季感あるままに、季感なきときは季感なきままに純一なる句作態度であれと云うのである。力強き直観こそ指導性ありと信ずるのである。

（「火箭を放つ」「天の川」昭和十年七月号）

俳句の価値を決する最も大きな要因は表現以前の問題―如何に力強き現実から其中核を把握してくるかにある。其の「把握の鋭さ、深さ」は実に俳句的技術だけに止まらず、作者独自の人生観、社会観の深さに裏づけられねば、能く為し得ない問題である。

この意味に於て俳人最後の問題は如何に哲学するかにあるのである。（「航跡に送る言葉」「旗艦」昭和十一年八月号）

生誕百年の秋、薩摩半島最南端、長崎鼻で毎年行われる修忌行事に参加し、献杯をした。「海の旅」三句を刻んだ句碑に諸焼酎を注ぐのである。一千キロ先の宮古島も見えるかという秋日和に、それは飲み干されるかのように蒸発し、芳香は我々を包み込んだ。

坂口昌弘は「不器男と鳳作」（「俳句界」二〇〇八年四月号）に「天折した魂はこの世に残る。天折詩人の霊は後世の人の心に乗りうつる。」と書いた。

鳳作の魂が現代の俳人たち、特にこれからの俳句界を担う若い人たちに乗り移り、何事にもクローズドであり勝ちな現在の俳句界に一石を投じることが願つて止まないのである。

(二〇〇九年十月刊「大阪俳人クラブ会報」第一二三号より、加筆修正して転載)

縁の糸

前田霧人

三年前、篠原鳳作の生誕百年と著者の還暦に合わせて評伝『鳳作の季節』を上梓した。鳳作は昭和戦前期、新興俳句の時代に活躍した鹿児島県の俳人で、無季俳句の名作「しんしんと肺碧きまで海の花び」の作者として知られている。「縁えだにの糸」とは竹内まりやが歌ったNHK朝の連続ドラマ「だんだん」の主題歌であるが、本書の成立までも様々の縁の糸があった。

本書の資料収集を始めたのは上梓の十年前、一九九六年のことである。鳳作に関する周知の文献は直ぐに集まったが、師の「十七音詩」主宰、金子明彦は「鳳作の評伝を紡ぐには縦糸となる彼の生涯だけでなく、横糸となる当時の新興俳句という時代背景が必要」と言う。

目標年月までに書き上げるには、定年後では間に合わない。二〇〇〇年、五十四歳でリタイアした。燃え尽きる程仕事をした訳でもないのに、直後から不定愁訴に襲われた。その時助けてくれたのが、厚生年金病院で副院長をしてい

た高校時代の同級生である。

二〇〇三年、一通りのものを書き上げた。体調も回復した。連載を約した師の金子明彦は二〇〇一年に他界、「十七音詩」はそれより先に解散となっていたから、連載先を探さなくてはならない。地元大阪で当時所属の結社は投句もろくにしていない幽霊会員であったから、連載など及びもつかない。

そんな折、「十七音詩」の系譜に繋がる大阪の俳誌で知己を得た女性から「この内容なら鳳作の地元、鹿児島で探したらどうか。」とのアドバイスをいただいた。

鹿児島で鳳作ゆかりの俳誌といえば「天街」の他にない。「十七音詩」とも長い交流があったと知ったのは後のことである。神宮司茶人代表(当時)とは一面識もなかったが、早速丁寧な手紙を添えて原稿を送付した。今から思うと随分と大胆なことをしたものであるが、その時は必死であった。

興奮したのか事前の連絡を失念していたが、代表の苗字を誤記したことに投函後気付き、その旨電話を入れたため結果としてそれを果たすことが出来た。部外者の連載には反対者もいたが、代表は「私の責任で」と説得して下さり、生誕百年の鳳作忌を迎える上梓目標の二〇〇六年九月に最終回となる配慮までいただいた。

推理小説でも謎を解くための鍵は大抵、関係者の故郷にある。本書の場合も、連載を機に「天街」同人にもなり、

鳳作の故郷鹿児島との繋がりが深まったことが決定的な意味を持つことになる。あとで分かったことであるが、この時、私はまだ収集すべき半分の文献しか入手出来ていなかったのである。

先ず、かごしま近代文学館に鳳作の遺品資料一式が所蔵されていることが分かる。鹿児島に縁もゆかりもない一民間人に当初数居は高かったが、連載が始まると少しずつ貴重な資料に触れることが出来るようになる。後には「こんな資料もあります。」と学芸員の方から紹介して貰えるまでになった。

また、鹿児島県立図書館には鳳作の活躍した当時の新聞が所蔵されていたから早い段階に訪れ、関係する記事を一通り収集していた。ところがある時、かごしま近代文学館で撮影複写した鳳作の句帳「俳句手記」に貼付された新聞記事切り抜きを何となく眺めていると、何枚か未見のものがあることに気が付いた。

早速、前回より範囲を広げて再調査した結果、新たに百件以上の記事が見つかった。これらの中には鳳作の未見の文章を始め、これまでの記述を根底から書き換える程の内容を持ったものが幾つも含まれていた。

これなどは重大な見落としをしている私にハラハラした鳳作が自らシグナルを送って資料収集を促した例であるが、他にも本当に数々の幸運に恵まれた。

例えば、大阪府立図書館で請求図書を待っている間に何

気なく手に取った文献目録にあった坪内稔典「篠原鳳作と現代俳句」（「俳句研究」所収）は山口誓子に対する鳳作のライバル心や秀子夫人の優しい心根を知るためには無くてはならないものであった。

また、「京鹿子」主宰の鈴鹿野風呂は七高を卒業し、一時、川内^{せんだい}中学に奉職するなど鹿児島と縁が深く、鳳作と「京鹿子」との係わりも浅からぬものがある。ところが、当時の「京鹿子」が公的機関にほとんど所蔵がない。

そんな折、現代俳句協会に入会し、懇親会で京大俳句会の先輩、高木智氏と四十年振りの再会をした。氏は京鹿子発行所がある「野風呂記念館」の図書係を兼務しており、そこに創刊以来の「京鹿子」がほとんど揃っていることが分かる。

そして、上梓も間近の校正の真つ最中、出版元の沖積舎より『渡辺白泉全句集』を寄贈されたが、その巻末の川名大編「評論年表」に渡辺白泉「十一年の鳳作」（「帆」所収）の記載があった。

鳳作の活躍した俳誌「傘火」の公的機関での所蔵に欠号が目立つ中、これは最晩年の鳳作をリアルタイムで語る上で実に貴重な文献となった。

ここには書き切れなかったものを含め、これら「縁の糸」のどの一本が欠けても本書の成立は覚束なかった。

「俳句の神様は居る」と私は思う。男神か女神か。多分女神であると、私は勝手に想像している。

後記

前田霧人

文字通りの三号雑誌で、ちょうど二年前の一月に第三号を出したあと、しばらく休刊しておりましたが、新年の一月を期して、第四号を出すこととなりました。

二年の間、何をやってきたかという点、試行錯誤の繰り返しで余り大したことも出来ていないのですが、その間、谷口慎也代表の「連衆」に数編の小論をありがたく執筆掲載させていただきました。

今回の号はそれらを中心に、その続編や、その他の雑誌掲載文を加えて一冊にまとめたものです。僅か二十頁、三分の二が転載文という内容ですが、これまでのものと合わせ、外堀を埋めたとは、とても言えないまでも、橋くらは架けられたのではないかと思っております。

これからは、歳時記城の本丸。正面から、あるいは側面から、雲行きを眺め、あるいは応援も頼みながら、どんなことになるか、「なるようになる」で楽しみながらやって参りたいと思います。

追記。今号を出す直前に友人に教えられ、西村睦子著『「正月」のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み』（二〇〇九年十二月、本阿弥書店）を読んでおりますが、資料の博搜振りとも相まって、今後の考察に様々の示唆を与えてくれる一書のようにです。

また、「夏の部」冒頭の記述で、太陽暦への移行を試みた虚子が大正八年から昭和九年の『新歳時記』刊行までの間、「西瓜」などを夏としていたという辺りのことは、拙稿「西瓜考」（『新歳時記通信』第二号）ではすつぱりと抜け落ちている内容で、素直に脱帽です。
著者は俳人協会の人。俳句に伝統も革新もなく、思いは同じ、正に「不易流行」のメビウスの輪であると、改めて思っている次第です。

「新歳時記通信」第四号

発行日 二〇一一年一月一日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

メール

表紙絵 浅田照行 *

「新歳時記通信」ホームページ

<http://mac.moo.jp/key/>

印刷製本 株式会社イニユニック *